

明日はいいことがある

八十二歳で逝った義母の口癖は
明日はいいことがある、だった

透析で週の半分は入院
甘いものには目がないのに
糖分、カリウム、カルシウムの
厳しい制限

六十キロ近くあった体重は
三十キロを切る有様で

それでも、娘の押す車椅子で
食事に、シヨップینگに
勇んで出かけていった

いささか、我が儘な気はあるが

負けず嫌いで、他にふるまうことが
何より好きで

数年前までは
ロシアやポーランドや、中国にまで
絵筆をもって
ひよいと
一人で出かけていった

七十半ばでパソコンに出会い
幾度も周囲の手を煩わせながら
牛乳瓶の蓋みたいいな眼鏡に
天眼鏡を持ち出し
ちゃんとメールの交換をしていた

人の出来ることは、自分も出来る

という無茶な言いぐさも

いつか無茶でなくなり

暗算は計算機より早く

小説を書いて一等賞をもらったり

エッセイで賞金を稼いだりした

死の床でも

明日はいいことあるんやろ

と呼びかけると

意識のない筈の手や足が

小刻みに震えた

義母が逝って四年

明日はきつといいことがある

とでも言わないと気が詰まりそうな

空気が漂っている

今度こそエッセイで一等賞を取る

と準備していたノートに

病室の仲間たちが

今にも笑い出しそうに

生き生きとスケッチされている

少年 A

人が恋しいと思ひ始めた頃
少年は厳しい掟のなかにあつた

島を出てはいけない
街を見てはいけない

少女はバスガイドをしながら
高校に通つていた
少年はときどき少女のバスに
乗り合わせた

少女のはにかんだ笑顔が
見たくて
少女のはずんだ
声が聞きたくて

島を出てはいけない
街を見てはいけない

少年には未来への扉が開かれて
いないとしか思えなかつた

少年は町役場の支所で
連絡係をしていた
殆ど一日口をきかないこともあつた
少年への掟は物心ついたときから
課せられていた

島を出てはいけない
街を見てはいけない
長男なのだから

少女のはにかんだ笑顔が
見たくて

少女のはずんだ
声が聞きたくて

一時間の時間をやりくりして
少女のバスに乗った

少女が街の専門学校に行く
ということは噂で知れた
バスの乗客のみんなが
少女のファンだった

島を出てはいけない
街を見てはいけない
長男なのだから

少女の卒業式が近づいた朝
少年はある行動に出た
細い切符に

かすれた鉛筆の字で
ありがとう
と書いて

バスを降りるとき
少女の目に触れる近さで
切符を渡した

島を出てはいけない
街を見てはいけない

少年は後も見ずに
支所までの八百メートルの砂利道を
全速力で走った

いのち

いのちあるということは
なんだろう

生きているということは
なんだろう

いのちあるということや
生きているということは
きつと

走ったり転んだり

泣いたり笑いころげたり

すねたり恨んだり

することなのだろう

無邪気に遊び

ときにはののしりあい

ときには激しく好きになり

次々と子供を生みおとす

陣取り合戦に夢中になり
相手の首をあげることに
夢中になり

返り討ちに逢い

血まみれになったり

しようとも

それがいのちを

生きている

ことなのだろう

静かな海に向かい

赤い夕日に胸を染めたり

野原に寝転がったり

流れる雲をただぼんやり

どこへいくのか

空っぽの頭で
眺めていたりする

父がいて母がいて
やがて

父も老い母も老い
自分も父や母が逝った
歳になつていていることに
フト気付いたりする

これが

いのちを生きている
ことなんだろうか

生きているから

いのちがある

のなんだろうか

いのちあるということが
なんだかよくわからない
生きているということも

なんだかよくわからない

でも多分

走ったり転んだり

泣いたり笑いころげたり

すねたり恨んだり

空っぽの頭で

ぼんやり海を眺めて

いたり

することなんだろう

内科医院

かかりつけの内科医院は
地域の老人たちの
駆け込み寺

清潔で感じのよい窓口
少々気難しいが気さくな医師

いつも新しい花で迎え
さりげないクラシックが流れる

テレビやカセットなど
質素なものだけど
老人達の話の輪には
さわりはない

けばけばしいものなど

なにもないが
駆け込み寺には
それがふさわしい

ときどき窓口からも
話に相づちをうち
穏やかな笑顔が覗く

かかりつけの内科医院は
地域の老人たちの
駆け込み寺だから

あまり混み合うこともない
恰好の待合室が
ゆつくりと時間を
刻んでくれる

詩人

おじちゃんは詩人かい
子供がいう

そうだとも

よくわかったな

おじちゃんは

大人臭くなくてさ

説教もしないし

パリッともしてやしないし

小遣いもくれない

いつまで経っても

飯粒をボロボロこぼすしな

説教なんて俺にはできやしない

ガラじゃないし

詩人で子供みたいなのこと
みんなが変わった人だと
おじちゃんのこというよ

ちっとも大人にならないよな

第一高所恐怖症だし

勿論金もないし

オンナにはもてないし

折り紙つきの変人だよな

それでやつぱり

おじちゃんは詩人かい

なんだかみすぼらしいからと

みんながいうよ

それに

結構トシなんだろ

九月の雨

明けきらぬうちから雨
まだ紅葉には早いから
雨の音も静かだ

今日を越すか
といわれたあなたの耳には
いったい雨の音が
届いているだろうか
ジュージューと鳴る
人工呼吸器の音が
雨の音を遮っている
のかもしれない

天から下に降る雨を
見たことがある
確か四時間に及ぶ

手術中のときだった
家々の屋根に
雨がこぼれ落ち
一つの屋根の下にいる
自分の横たわる姿が
見えていた
今あなたは
峰にかかる雲の上から
あなたの足を撫でさする
私たちの姿が見えている
だろうか
必死にあなたの耳に
伝えようとする声々が
届いているだろうか

どこへいくのか

九月の朝

急激に冷え込んだ

空の上

あなたはどの色の道標を

たどろうとしているの

だろうか

挽歌

一人一人を丁寧に見送ってきた
あなたが

今度は見送られようとしている

ものには順序があるとはいえ
やはり悲しい

殊更丁寧に人を見送ってきた

あなただから
余計に悲しい

向こう岸からは

あなたに見送られた幾人もが

あなたが着くのを

今か今かと待っている
に違いない

これは悲しむべきことではない
と頭では考えても

私たちはやはり悲しい

別れはどうであれ悲しい
どうでなくとも悲しい

せめてあなたが

別れた後出会うことの喜びの
大きさを思い信じ

悲しい別れを果たそう

コスモスのうた

美術館を

素足で歩くひとよ

青磁のタイルの上を

素足で歩くひとよ

やわらかでいて

たおやかでいて

意志的でいて

とてつもなく強い風にも

とてつもなく強い雨にも

さりげなく

そよぐひとよ

明日はないと

宣告された日から

まだ十月

奇跡のごとく立ち上がり

スケッチブックを抱き

さりげなく

歩くひとよ

解き放つ

人という頸木を解き放たれ
旅に出る

間違いない

元来た道をたどり

元から住み慣わしたところに
戻るのだと思う

しかし来るときと同じく

戻るときは垣根はさらに高く

険しい

樂觀過ぎるのかもしれない

夢みたいなお話なのかもしれない

間違いない戻る道があり

住み慣わしたところに
戻るなんていうのは

ナンセンス

の一言で片付けられて

しまうのかもしれない

解き放たれるのではなく
むしろ絶対無間の無に帰して

しまうのかもしれない

そうであるかもしれないと
長い間信じてきた

しかしそんな無体な話は

今はごめんだ

もう願ひ下げだ

この人という頸木を続ける
ことの方が理不尽だ

人というやつは

悪辣千万なことを考え

平氣の平左で

とんでもないことを

やらかしてしまふ

そのくせ

どう頑張つても

その域から抜け出せない

と見える

勿論頑張りが足りないのだ
とはよくよく思ふ

若いうちにも

いろんなことをやらかして

しまふのだが

そうでなくとも

やがて老いというやつが来る

また誰彼となく責めつけ

さんざんに傷めつける

業病というやつもある

こういうわけだ

いやこういうわけではかないから

人という頸木を解き放たれ

旅に出る

という発想も

許されてもよいのではないか

そう信じきって

いっそ騙されたって

平氣の平左のまま

悪辣千万なことをやっている
こととたいして変わりはない
こういうわけだ

間違いない

元来た道をたどり

元から住み慣わしたところに
戻るのだと思いたい

罰が当たったって

五十歩百歩

大同小異

目糞鼻糞を笑う

の類いではないか

美しいうた

美しい夢をみた

明け方のまどろみであった

しかし、なんの夢だったか

どんな美しい夢だったか

青い色であったか

白い色であったか

光に満たされていたか

何に感じたのだったか

歌だったか、言葉だったか

山の形だったか、水の色だったか

しかし、実に美しい夢だった

美しい

とはげしく思ったところで

目が醒めてしまった

今も胸の動悸激しく

美しい夢をみた

という思いは去らない

もつとも、とうから

夢に理屈など

ないのかもしれない

よくよく考えたりしたら

夢が夢でなくなる

のかもしれない

名人

毎朝一人の男によつて
駅のゴミ箱の清掃がなされる

容器のフタを開け

ビニールの袋を取り出す

袋の中身に手を入れ分別する

分別したゴミを

中途まで入れた別の袋に

それぞれ入れ込む

空き缶

ペットボトル

週刊誌

食べ物の殻

一杯になった袋の口を
ぎゅうつと結ぶ

新しい袋一枚を

空になった容器に被せ

丁寧に四つに折りたたんだ

新聞紙を容器の底に沈める

真新しくなった容器を傾け

四方から確かめ頷く

雑巾を取り出し

容器をキュルキュルと拭きあげる

男がこの間に費やす時間は
ほんの三分

黒い野球帽をあみだに被った

男は実に手際よく

その場に新しいゴミ箱を

仕立てあげる

三分の後には

ちゃんと次の仕立てにかかる

鼻歌を歌いながら

黒い野球帽をあみだに被った

男はいつも

実に機嫌がよい

同じ時刻に

同じフオームに降りる

ことになって一年

男は傍のゴミ箱を

次々に作り替えていく

ホームが込んでいようと

若い女が群れて騒ごうと

ひどい雨が降ろうと

黒い野球帽をあみだに被った

男はいつも

鼻歌を歌いながら

三分という実に正確なタイムで

次々に

新しいゴミ箱を仕立て

生み出していく

さはさりながら

ニュースを見ても

新聞を読んでも

有効求人倍率五割未満などという
記事が踊る

そのくせ、疑獄、汚職、天下り
などはとんと無くならない

六十歳定年者は溢れるものの
年金は出ないから

こちらの方にはわけのわからない
臨時ポストをこしらえたりする

となると

肝心の就職年齢の若者に割く

ポストがない

もつとも、就労に耐えうる

堅牢、堅固な職場はどんどん
目減りしていく

若者たちは結婚もできない

子供も生まれない

定年を過ぎた親の
わずかな稼ぎで食っていく

子供が少ないから

親も子も我が儘で、甘ったれで
互いに我慢ができない

変な事件が増える

ささいなことで殺し合う

マスコミが芸能番組まがいの
ニュースに仕立て上げる

もうなにが最初で

なにが因業、因果で

なにがどのように捻れて
どうなったのか

その渦中にいて

その空気を吸っていてさえ

説明に窮してしまう

正しいとか、正しくないとか

そんな話はどうにどこかへ
飛んでいってしまった

さはさりながら

宇宙船地球号の上に

悲しい目をした人間という

種のものたちがしがみつき

土地の上を睨めあげながら

ズルズルと時を過こしている

ありがとう

やさしくしてくれてありがとう

助けてくれてありがとう

怒ってくれてありがとう

絶交だといってくれてありがとう

口惜しかったこと

身も世もあらぬほどに嘆いたこと

心底から怒り狂ったこと

勘違いが発端で憎まれたこと

大切なものを取り上げられたこと

振り返ってみれば

こんなにたくさんの

私を取り巻く人々がいて

私になにかのアクションを投げ

私にいろんなことを考えさせ

私のでっぺんをへこませてくれた

あんなにも言いにくいことを

それが例え感情を交えた仕打ちであれ

本心からの憎しみであったにしろ

真剣に言い募ってくれた

振り返ってみればこそ

あの冷たい言葉が

私を激怒させ

私を踏みとどまらせ

あの嫌味あふれる仕打ちが

めぐりめぐって

私のことを他人の身に振り替えて

考えさせてくれることになった

どこへいくのか

時を経て今、それらを

私の心に伝えてくれようとしている
いや、ようよう私が気付きつつある

まるで縄目模様のありさまだ

本当に精巧に仕組まれたドラマだ

あんなに酷いことの一つ一つが

紫陽花

今年も門口に

凜と、紫陽花が咲いた

青、紫、赤、白

一移り気、高慢

美しいが冷たい

辛抱強い愛情

花言葉を見れば

いかにも、と思わせる

落ち着いた青い花弁は

分別を十二分に持った

淑女というところか

頬を赤らめた赤い花弁は

恋する乙女か

紫色の花弁はといえば

妖しい魅力を湛えた

傾城なのかもしれない

白色の花弁となると

哲学者の風貌を持ち

軽々には近付きがたい

花言葉はさすがだ

門口の紫陽花に見送られ

背筋をしゃんと伸ばし

今朝も一步を踏み出す

(付記)

花言葉―花言葉事典 (web) を参照

光舞う

厚い雲からこぼれ出た
朝の光が舞い下りる

辻辻から人が出てくる
辻辻から車が出てくる

新鮮で透き通った光が
屋根をすべり窓をすべり
水辺に佇む鷺の長い脚を
すべり

辻辻から子供が駆け出す
辻辻から母が手を振る

厚い雲からこぼれ出た
朝の光が舞い走る

遠くから電車が滑り込む
構内に人があふれる

少し濁った川が
落ち着きを取り戻し
風を滑らせる

クマ蟬が一斉に鳴きたてる
後ずさりしたり
枝から枝に移ったり

厚い雲からこぼれ出た
朝の光が舞いおどる

五月の雨

鍼師に調子を尋ねられ

五月は朝日が強烈で

あまりの強烈な光の明るさに

ときならぬときに目覚めてしまうから

リズムが変になる

という類のことをいったことの意味に

後になって気付く

光ということばは

禁句だった筈だ

他意は全くなかったのだが

いつも間髪を入れずに戻ってくる

鍼師の返事に

微妙なためらいがあったことに

すぐには気付かなかった

多分これらに近いことを

多くの場面で言い

多くのことを

そのまま見過ごしているのに

違いない

侘びを言っても

始まらないのかもしれないが

なんとも心苦しい

謝れば済むのだろうかと考えれば

そう単純な話でもない筈だ

そもそもが

相手を傷付けないように

という思い自体に

傲慢な思いが半分以上は隠されている

のではないだろうか

思いやことばや態度は
慰めにもなる代わりに
思わぬ武器にもなってしまうことの
なんと多いことだろう

それにしても今日の雨
五月に入って何日目の雨だろう
強烈な朝日の洗礼を浴びることなく
ほの暗い中で目覚めたとき
やはり同じ早朝の四時だった

ということは
条件反射という類のこと
であるのかもしれないが
どんなに朝日が強烈であろうと
音のない静かな雨が降ってしようと
リズムを感知しているのは

自分自身の中にあつて

方向はこうだとか
こうすればいいのだろうかとかの
判定にしゃしゃり出ようとしたりする
目立ちたがり屋で気まぐれの
やじろべえで
あるのかもしれない

クローバ

雨があがり

川面が涼やかになった

日を受けた水が

川底を透いて流れる

かすかに渡る風に吹かれ

絹色の水の肌が

川中にできた島に

とろとろと寄せる

青い島に白い靄がかかり

静かに寄せてくる水を

懐にやさしく呼び込んで

サラリとかわす

白い靄は白詰草

そう、群生するクローバだ

花言葉は約束

私を見て、ともある

あるいは復讐、だとも

絹色の水の肌に

なにを約束し

なにを復讐しようというのか

そんなに見てほしかった

ものはいったいなに

いつか皇居の堀端にも

なにかの意志を持つもののごとく

空の色に繋が

煙り、群生していた

いま雨に洗われたクローバは
静かに寄せてくる水を懐に
やさしく呼び込んで
水に流していく

約束

私を見て

復讐

クローバはこれらの
全てを遂げるため
川中にできた島や堀端に
白くひそやかな強さで咲き誇り

とるところと寄せる水に
茫洋と思いをいたし
はるかな胸を開き
火照りから冷めやらない
身を浸すのかもしれない

(付記)

花言葉―花言葉事典(w e b)を参照